

近世の宗教

Overview

- ◆ キリシタンとその影響
- ◆ 神道とナショナリズム

キリシタンと その影響

カトリックの伝来

- ◆ 1549年、イエズス会のフランシスコ・ザビエル（1506-1552）がキリスト教（カトリック）を伝える。
- ◆ ザビエルはパリでイエズス会の設立に関わった（1534年）。
- ◆ 鹿児島、山口を経て京都へ。再度、山口、鹿児島へ（1551年まで）。
- ◆ 日本宗教を研究。当初、神を「大日」と訳す。違いがわかった後、「ダイウス（デウス）」と呼ぶ。



キリシタンの 拡大



- ◆ 九州では、南蛮貿易の利益を期待して、大名たちがキリシタンに改宗。
- ◆ 京都では、高槻城主・高山右近（1552-1615）がキリシタンに。
- ◆ 織田信長は宣教師フロイスに布教を許可し、京都四条に南蛮寺を建てさせた（1576年）。

此付近南蛮寺跡

ばてれん 伴天連追放令

- ◆ 豊臣秀吉は最初キリシタンを保護していたが、1587年に伴天連追放令を出す。
- ◆ 伴天連：ポルトガル語 Padre（神父）から
- ◆ 「日本ハ神国たる処ぎりしたん国より邪法を授け候ふ儀、太（はなは）だ以て然る可からず候ふ事」
- ◆ 秀吉は自らを絶対的な支配者として神仏の中に位置づけることを望んだ。
- ◆ 1597年、長崎二十六聖人殉教

キリシタンの全国的拡大と弾圧

- ✦ フランシスコ会、アウグスチノ会、ドミニコ会も来日
- ✦ 江戸幕府が開かれた17世紀初頭、キリシタンは最盛期を迎える。
 - ✦ 全国の信者は70万人。民衆の中に根を下ろす。
- ✦ 1613年、キリシタン禁教令
- ✦ 1628年、踏み絵の開始



島原の乱とその後

- ✦ 1637-38年、約4万人が原城に立てこもって抵抗。
- ✦ 1639年、鎖国の本格化。
- ✦ 1664年、寺請制度（檀家制度、寺檀制度）の開始
- ✦ 17世紀末にはキリシタンはほぼ消滅。
 - ✦ ごく一部は「隠れキリシタン」として200年以上にわたり信仰を守る。

島原の乱関係の文学作品

- ✦ 中牟礼道子『アニマの鳥』筑摩書房、1999年。
 - ✦ 歴史資料に裏付けられた壮大なドラマ。
- ✦ 遠藤周作『沈黙』新潮社、1966年
 - ✦ 島原の乱直後の時代を描く。



神道と ナショナリズム

天皇の復権

- ✦ 水戸学
 - ✦ 儒教と神道を取り入れて尊皇を唱える。
- ✦ 国学
 - ✦ 本居宣長、平田篤胤らによって発展。
- ✦ 水戸学、国学ともに、明治維新の指導原理となる

本居宣長（1730-1801）

- ✦ 『古事記伝』：『古事記』の「聖典化」
- ✦ 天照大神—天皇という一元的な系譜の確立
- ✦ 漢意（からごころ）の排除
 - ✦ 「第一に、漢意・儒意を、淨く濯（すす）ぎ去て、やまと魂をかたくする事を、要とすべし」（『うひ山ぶみ』）。



平田篤胤 (1776-1843)

- ✦ 復古神道
- ✦ 天皇は記紀神話をはじめとする古典によって絶対化される。儒教・仏教と習合した神道を批判。



日本の古層の再発見

- ✦ 「古層」の再発見と創作 (invention)
 - ✦ 純日本的な原理の探求
- ✦ 古典の再聖典化 (re-canonization)
 - ✦ 天皇の神性の実証

現代のことはば

こはら
小原 克博



図書室はもつとも整理整頓がなされている場所であるべきだが、現実には、分類困難なものが段ボール箱や棚の奥に押し込まれている場合がある。私が管理責任を負っていた図書室にも、貴重な本や物品を大事にしまいい込み、結果的に何があるのかよくわからなくなっていた一角があった。最近、その場所を整理しているさなか、偶然、踏み絵が二つ見つかった。

それが本物かどうかは判断のしようもなかったが、踏み絵の裏側には「寛文九年」の作とあ

めたいという欲求に駆られた。聖杯伝説の謎を解く「ダ・ヴィンチ・コード」さながらのミステリーの幕開けである。

その踏み絵は誰よって入手されたのか。その謎を解くための文献的史料は現存しないが、類推することはできた。二十世紀初頭、同志社大学で教鞭を執ったギューリック宣教師が宗教博物館の設立を構想していたとの記録が残っており、実際、彼はいくつかの品を収集していたようである。明治時代、長崎の宣教師と同志社の宣教師は交流を持っていたので、ギューリックがそのルートから踏み絵を入手したことは十分に考えられる。

しかし、なお残る根本的な疑問は、そもそも、その踏み絵は本物なのか、複製品なのか、と

いうことであった。実は、一つの踏み絵の裏側には先の制作年だけでなく「禁複製」の文字が刻まれていた。「禁複製」の刻印をもつものが複製品だとしたら、これほど皮肉なブラック・ジョークはない。本物であってほしいという、ほのかな期待と一抹の不安を抱えながら、この分野の専門家に鑑定を依頼することにした。

その専門家によれば、現存する、ごくわずかの真正の踏み絵は重要文化財として保管されており、もし新しいものが発見されたとすれば大事件だという。私の期待は一気に揺らいだが、結論を出すために必要な調査の数を待った。結論は、複製品であった。明治のロマン派の文人たちにとって、虐げられたキリシタンが格好の文学の題材と

なり、当時、キリシタン・ブームを巻き起こした結果、長崎・天草を訪ねる観光客のために踏み絵等、多くの偽物が製造されたいらしい。私が手にしたもの、その一つであった。

踏み絵のミステリーは、あっけなく幕を閉じた。しかし、江戸時代から明治時代にかけての日本史の断面を垣間見ることができたのは貴重な経験であった。思想信条の違いが人の命をいとも簡単に奪ってきた歴史をわが国も持っている。そうした歴史の事実に向き合わずに「日本は寛容な国である」という思い込みを複製することなかれと、「禁複製」の刻印はささやいているかのようであった。
(同志社大教授・キリスト教思想)

踏み絵騒動

京都・宗教系大学院連合の取り組みについて

京都・宗教系大学院連合 事務局長
同志社大学神学部 教授

小原 克博



一 設立の経緯と目的

「京都・宗教系大学院連合」（以下、本連合と略す）は、二〇〇五年七月三十一日に設立された。大谷大学院文学研究科（浄土真宗）、高野山大学院文学研究科（真言宗）、種智院大学仏教学部（真言宗）、同志社大学大学院神学研究科（キリスト教・イスラーム・ユダヤ教）、花園大学大学院文学研究科（禅宗）、佛教大学大学院文学研究科（浄土宗）、龍谷大学大学院文学研究科（浄土真宗）の七つの大学院および大学がその加盟校となっている（五十音順）。

またこの他、以下の九つの研究機関、学会等が協力団体として加盟している。高野山大学密教文化研究所、国際真宗学会、宗教倫理学会、種智院大学密教資料研究所、同志社大学一神化学際研究センター、南山宗教学化研究所、NCC宗教研究所、日本クリスチャンアカデミー、龍谷大学仏教文化研究所。

言うまでもなく、こうした広範な教育研究ネットワークは一夜にしてできあがったわけではない。二〇〇四年から準備委員会を立ち上げ、構想を練り、関係者の理解と協力をあおぎながら、ようやく設立に至った。様々

な困難に直面しながらも、忍耐強く議論を進め、合意形成を目指すことができたのは、そこに関わった誰もが、既存のリソースを最大限生かすことのできる新たな学術ネットワークの必要性を感じていたからに他ならない。

そこでは、狭い京都の中にありながら、近隣の宗教系大学院・大学院同士がお互いのことを十分に理解せず、また適切な情報交換がなされないのは、もったいないという認識が共有されていた。また何より、将来の宗教界や学問世界を担う若者たちに、より広い視野を身につけた上で、それぞれの伝統を深めていつてもらいたいという期待が強かったように思う。

このような共通のビジョンを育んだ後、各校の学長が「設立の趣旨」にサインし、本連合は設立に至った。「設立の趣旨」を要約すると次のようになるだろう。本連合は、宗教の多元化が進行する中で、京都を中心とした宗教系大学および大学院が、それぞれの宗教や宗派の特色を生かした教育プログラムを展開し、次世代の宗教研究者や宗教指導者の人材育成を行い、研究上の相互交流を図ることを目的としている。また、京都を

中心に形成された、このような学術ネットワークを広く世界にオープンにし、国際社会との学術交流を促進することを目指している。

こうした宗教系大学院の連合体は国内で例がないだけでなく、世界的に見ても非常にユニークである。本連合の加盟団体が主催する行事や、その他の最新の情報は、ウェブサイトを(<http://www.kgus.jp>)をご覧ください。宗派・宗教の違いを超えた情報交換・情報発信が活発に行われていることがわかるはずである。次に、本連合が目下取り組んでいる事業について紹介する。

二 単位互換制度

二〇〇六年度から、加盟大学院間の単位互換制度を実施している。二〇〇七年度は、加盟各校から合計一八一科目が単位互換科目として提供されており、四〇名余りの学生が履修登録している。加盟大学の学生には「単位互換制度のご案内」というパンフレットを配布し、周知を計っている。学期ごと、あるいは、年度ごとに、学生による授業評価アンケートを行っているが、学生の満足度はおおむね高

く、さらなる充実を願う声も聞こえる。学生からの意見に真摯に耳を傾けながら、改善を重ねていく予定である。

京都では「大学コンソーシアム京都」を基盤として、コンソーシアム加盟大学間の学部レベルでの単位互換制度がすでに実施されている。この制度は、全国にある他の大学コンソーシアムを質・量ともに圧倒する、京都が誇るべき知的インフラの一つである。しかし、大学院レベルでの単位互換制度は、二〇〇六年当時、京都で実施されていなかっただけでなく、全国的にもめずらしいものであった。本連合は、日本の大学院教育に対してもモデル的な役割を果たしており、その先進性は、今後も、形を変えて発揮されていくべきであると考えている。

三 研究会・公開シンポジウム

本連合の研究活動の柱として、年に二回行われる「仏教と一神教」研究会がある。これまで実施されてきた三回の研究会の発表内容は次のようなものである（敬称略）。

「第一回研究会」ロバート・ローズ（大谷大学）「仏教とアメリカ文化の対話」、高田信良

（龍谷大学）「宗教の教学―宗教対話の可能性を求めて」、安永相堂（花園大学）「東西靈性交流二五年の歩みから」。「第二回研究会」小原克博（同志社大学）

「近代日本宗教史の中の「原理主義」―キリスト教原理主義との比較」。「第三回研究会」モジュータバ・ザルバーニ（テヘラン大学神学部助教授）「仏教とイスラム教シリア派との比較研究」。

また、本連合の取り組みを社会に還元するために、年に一度、公開シンポジウムを開催している。二〇〇六年には加藤周一氏に「異なる宗教間の対話」と題して、また、二〇〇七年には山折哲雄氏に「死者を送る」と題して基調講演をしていただき、その後、パネル・ディスカッションを行った。

研究会や公開シンポジウムの報告は、本連合の機関誌「京都・宗教論叢」に掲載されている（年一回発行）。

四 組織・運営

以上のような事業の企画・運営は、本連合の評議会によって行われている。評議会は、加盟各校から二名ずつ選出された評議員、計一四名によって構成されている。二〇〇五～六年

度の議長は武田龍精氏（龍谷大学）が、二〇〇七～八年度の議長はロバート・ローズ氏（大谷大学）が務めている。また、本連合の事業を実施していくために、各校から運営分担金を徴収している。今年度は各校二〇万円ずつの負担となっているが、今後、事業を拡大していく際、一四〇万円の年間予算では不足が予想される。財政基盤をどのように強化していくかは、今後の課題である。

五 個人的な見解

さて、ここまで本連合の事務局長として「公式見解」のようなものを記してきたので、最後に個人的な思いを述べてみたい。

一八七五年に同志社が設立されて間もなく、京都市民、とりわけ仏教勢力からの猛烈な排撃運動にさらされた。一八八一年、同志社が四条南劇場で開催した「基督教大説教会」などが火付け役となり、仏教による「耶蘇退治」が本格化していったのであるが、当時の記録を見る限り、それはさながら「宗教戦争」のようであった。当時、新島襄は仏教からの批判の矛先をかわず、のちに精一杯であった。それゆえ、

もし新島が、仏教の研究者とキリスト教の研究者が深い信頼関係を結び、京都や日本の将来について語り合っている本連合の様子を見れば、腰を抜かすに違いない。私の大学院の授業には、将来、僧侶になる大学院生たちがやって来て、キリスト教や、仏教とキリスト教の関係などを学んでいる。新島が生きていた時代には、想像すらできなかったことである。

私は、本連合の取り組みを通じて、次世代を担う優れた僧侶、仏教研究者が育つことを真剣に願っている。京都に息づいた、固有の仏教文化・伝統は世界に誇るべきものである。しかし、その真価を、世代を超えて発展させていくためには、伝統の内に引きこもってはいけけない。他の宗派、他の宗教からも多くの刺激を受けながら、また、世界の情勢を見据えながら、二一世紀の仏教を大胆に思い描くべきなのである。

伝統の中核たる宗教が、今、新たなフォーメーションのもと、伝統の殻を打ち破ろうと共振し合っている。そのダイナミズムの中から、将来の京都そして日本の宗教界を担う逸材が誕生することを願っている。